

院外茶話

vol.146 平成 29 年 7 月 1 日

お金は貯めておけるけど
時間はいつも使い切り
贅沢な時を過ごすには
他のことを全て忘れて

悠長のすすめ



アメリカ映画といえばモニュメントバレー。

テレビをつけるとすぐに消したくなる。でも、消すと静まりかえってしまうのでまたつける。映った番組が気に食わないと、今度はチャンネルを変えてみる。それでもつまらないと、また変える。

こうしてちょこちょここと、チャンネルを変えていたらモノクロの映画が映っていた。古い西部劇で、かすかな記憶はあったけれど、途中から見たので何というタイトルかわからない。でも、そこに流れていた曲が「愛しのクレメンタイン」だった。

「オーマイダーリン オーマイダーリン・・・」
何百回も、あるいは何千回も耳にしたメロデー。

「オーマイダーリン クレメンタイン」
ここまでは口ずさむけど、その先の歌詞は未だにわからない。

日本では雪山賛歌といって、歌っていたのは
ダークダックスだったか。

この曲をバックに、西部の町のかなたに映る荒野は、高いテーブルのような形をしたモニュメントバレーである。モノクロの映画なのに、赤茶けた大地と、ぬけるような青空が見えたのはなぜか。

それはこの場所で、数多くの映画が撮影されたから。「駅馬車」も「黄色いリボン」もここが舞台になった。その後、カラーの時代になってからも、「イージーライダー」や「バック・トゥ・ザ・フューチャー」にはモニュメントバレーが映って、青空と荒野の色彩が、モノクロのフィルムに重なって見える。

やがて画面には O.K.CORRAL と書いた看板が映って、この映画は「荒野の決闘」であった。

「駅馬車」とともにジョン・フォード監督の代表作にあげられる映画で、私が生まれる前の封切りだった。だから、初めて見た時にはすでにリバイバルの上映で 3 本だて 50 円。

保安官のワイアット・アープを描いたもので、同じワイアット・アープでも「OK 牧場の決闘」はその後にリメイクをされた作品。

主演はヘンリー・フォンダとヴィクター・マチュア。ワイアット・アープと、ドク・ホリデイがならず者のクラントン一家と決闘をするという粗筋。

ドクは拳銃の名手だけれど、胸を患って西部の町で酒におぼれた生活を送っている。そのドクを東部から追いかけてきた美女がクレメンタイン。



オーマイダーリン クレメンタイン。

偶然に出会った映画が懐かしくて、最後までチャンネルを変えずに見たけれど、ドクがコンコンと咳をする肺病の演技は、どうもわざとらしくていけない。

日本の映画で同じような咳をしていたのが、天保水滸伝に出てくる平手造酒。北辰一刀流は千葉道場切っ手の使い手。肺病を患ってコンコンと咳をしながら、酒におぼれた生活を送って、最後には飯岡助五郎を相手にヤクザの出入り。

拳銃が刀になって、O.K.牧場が大和根河原になったけど、心をよせた女が追いかけてくるまでところまでそっくりの内容。

どちらも悠長な映画だった。

当時はラジオの全盛期で、銀幕の映画と言えば鞍馬天狗であれゴジラであれ、人々は興奮したのである。

しかし、映画が量産体制に入ると、観客の目も肥えてくる。ストーリーは複雑になって、アクションは派手になって、今のスパイ映画なんて、もう最後まで見ても誰が敵で、誰が味方かわからない。

何より大きく変わったのがテンポの速さ。「カサブランカ」も「東京物語」も、記憶に残る名画ではあるけれど、今一度見直してみると、悠長な進行にいらいらしている自分に気づく。



今では 30 秒の動画でレシピがわかる。

テンポが速くなったのは映画ばかりでない。東京都知事にあげる報告書は、どんなに重要な事柄も A4 一枚にまとめると聞いたけど、本当だろうか。

そうだとすると、この院外茶話も A4 の表裏を使って、長すぎるのかもしれない。

料理のレシピ本と言え、厚手の紙にきれいな写真というのが相場だった。ずっしりと重くて、素材の下ごしらえから焼き方、煮方、盛り

付けまで、長々と解説をしていたものが、今はたった 30 秒の動画で配信される。

こんな時代だからたまにはゆっくり、読書をしようと思っても、座った途端に別の用事が頭をよぎる。まわりからはインターホンや電話の雑音が飛び込んできて、数ページも読んだら本を閉じて立ち上がる。

開いた本がたまたま昔の純文学だったりするとどうなるか。

「・・・妙に懐かしい気がして、そこから床の中庭の方を見下ろすと、そこにはそんなに広くもなく、土塀の向こうに窺っている隣家の屋根と樹木の梢が・・・」

これは谷崎潤一郎の「都市情景」の一節。

緻密な描写が続くけど、私にはもうそれを味わうだけのゆとりがない。

日本文学全集の顔ぶれと言え川端康成、佐藤春夫、田山花袋に島崎藤村。どれも覚えてはいるけれど、もう一度読んでみようとは思わない。

世間はもう、このテンポに付き合ってくれない。電車を待つ 3 分でさえ、何もしないで過ごす人がいないのだから。



電車を待っている間もこの姿勢。

昼間だけでは終わらない仕事は残業、持ち帰りで、隙間の時間はスマホで埋める。朝から晩まで何かに追われるのが当たり前の日々。

ふとしたおりに、何もしない時間が訪れるとどうしてよいかわからない。

こんな日常はあまりに忙し過ぎていけない。ただ流れていくだけの時間を気にせずに、悠長な映画を見て本を読む。他のことは忘れて、存分に時間の無駄遣いをして、過ごして見たいと思うのです。